

武田薬品×日本NPOセンター協働事業

## 成果報告書

vol. **7** 

(2016年3月・9月 助成事業終了団体)



## プログラム概要

本プログラムは、東日本大震災により被災した地域の復興のため、認定特定 非営利活動法人日本NPOセンターが武田薬品工業株式会社から、アリナミ ンの収益の一部を寄付金として受け、主に岩手県、宮城県、福島県を対象に 実施するものです。

実施期間は、震災からの復興にかかる期間を10年と考え、第1期を前期5年間、第2期を後期5年間としています。

プログラムのテーマとして、被災地の方々の「いのちとくらし」を大切に紡ぎ直すために、大きく「人道支援」と「基盤整備支援」を掲げています。

第1期のプログラムの形態については、支援活動を行っている多くの民間非営利団体に対する「助成事業」と日本NPOセンターがさまざまな関連団体と連携して実施する「自主・連携事業」とに分かれます。

本報告書では、第5回継続助成(2015年4月~2016年3月)11団体、第6回継続助成(2015年10月~2016年9月)5団体、計16団体の活動内容と成果を報告します。

## 『助成の趣旨

タケダ・いのちとくらし再生プログラムの一環として、東日本大震災で被災された方々の「いのち」と「くらし」 の再生を願い、武田薬品工業株式会社からのご寄付をもとに、被災3県(岩手、宮城、福島)を主な対象とした 民間の支援活動に対して助成します。

## |助成金額と助成期間

助成1件につき500万円~1,000万円を1年間で助成(最長3年間の継続助成の可能性あり) (継続助成については300万円~1,000万円)

## 助成対象となる活動

「いのち」と「くらし」の再生に関わる下記の活動を対象としています。

#### いのちの再生

人道支援の視点から、社会的に弱い立場にある被災者(子ども、高齢者、病人、障害者、災害遺児・遺族、経済的困窮者等)が尊厳をもって生きていけるよう、その人権を尊重し、日常生活を支援し、保健・医療・福祉の充実を図る活動。

### くらしの再生

復興にむけた基盤整備支援の視点から、被災した人々が生きがいのある暮らしを回復できるよう、生活の場・仕事の場を再建し、生活基盤を整備する活動。なお、これらの活動に関わる調査研究や政策提言活動も対象とします。

## |いいのちとくらし再生委員会(第1期)

本プログラムを実施するにあたっては、日本NPOセンターに事務局を設置し、被災地の関係者および、各分野の専門家などで構成される「いのちとくらし再生委員会」がプログラム全体の検討と助成の審査を行います。

#### 委員紹介 (五十音順·敬称略·2016年3月当時)

- 石井 布紀子 (特定非営利活動法人さくらネット)
- 大久保 朝江 (認定特定非営利活動法人杜の伝言板ゆるる)
- 金田 晃一 (武田薬品工業株式会社)
- 渋澤健 (シブサワ・アンド・カンパニー株式会社)
- 長沢 恵美子 (一般社団法人経団連事業サービス)
- 早瀬 昇 (認定特定非営利活動法人日本NPOセンター)
- 藤田 和芳 (株式会社大地を守る会)
- 横田 能洋 (認定特定非営利活動法人 茨城NPOセンター・コモンズ)

## タケダ いのちょくらし 再生プログラム

武田薬品 × 日本NPOセンター協働事業

# 鼎談



武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーションズ&パブリックアフェアーズ 吹田 博史さん



-般社団法人 経団連事業サービス 長沢 恵美子さん



認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター 田尻 佳史

# タケダいのちとくらし再生プログラムーまとめとこれから

(2017年1月19日第5回継続助成・第6回継続助成完了報告会での対談より)

## 1. 団体の発表を聞いて

田尻: みなさま発表お疲れさまでした。1時間半、じっくり聞いていただいたと思います。これからの時間は「まとめとこれから」というテーマで、吹田さん、長沢さんにお話を伺っていきます。まずは発表を聞いての感想をお願いします。

吹田: 震災から6年が経ち、最初の頃に比べて発表の力が向上されたことに感激しています。日々、現場でさまざまな活動をされているプレイングマネージャーの方ばかりですので、非常に大変だったと思います。 団体のみなさまにやりきる力がついてきたと感じています。

このプログラムを始めるにあたり、 最初の日本NPOセンターからの提 案では「くらし」のテーマがメインで した。しかし、当社は人々のいのちに 携わる製薬会社ですので「いのち」 をテーマに入れ、緊急的な活動と長 期の復興の両方を支援することとし ました。「いのち」と「くらし」に関わる 非常に幅の広いフィールドのなか で、団体のみなさまが5年間を乗り 切ってこられたことを、改めて感じま した。

**長沢**: 今日参加させていただき、 このプログラムにずっと関わらせてい ただいて本当に良かったと思いまし た。最初のころに比べ、事業の成果がきちんと見えてきていると感じます。今、「グリッド(生きる力)」という言葉が話題になっており、みなさまの中にそれがあったのだと思います。

また、参加団体同士が関心のある団体の発表を聞くことのできるポスターセッション形式の今回の報告会はとても良かったです。それぞれの団体の方々がどこへ行って、どんな質問をされているかを拝見して、みなさまの関心や課題意識も知りながら報告を聞くことができました。

日本NPOセンターの助成 事業や研修事業のなかで、タケダ・ いのちとくらし再生プログラムの助成 事業の特徴は、助成した団体同士 がつながり一緒に事業を行う例が 多いことです。今日報告された南三 陸町のさとうみファームと女川町の コミュニティスペースうみねこは、い ずれも食品の事業をされており、もう 1団体と3団体で一緒に事業を実施 されています。さとうみファームは、過 去このプログラムで助成した吉里吉 里国の自伐型林業を助成報告会で 知り、チェーンソーの使い方を教え てもらうなどの協力を得ています。こ うしたさまざまなつながりがこのプロ グラムを通じて生まれており、今日も 新たなつながりが生まれればと思い ます。

## 第1期助成事業を終えて



報告会の様子

## 2. 第1期助成事業の5年を通して

**田尻**: 2011年から開始した第1 期助成が今日のこの報告会で終了 します。この5年を通じ、助成事業を どう評価されているかをお二人にお 聞きしたいと思います。

吹田: 当社がCSR活動を推進 する専門組織をコーポレート・コミュ ニケーション部内に新設したのは 2010年4月で、これほど大規模なプログラムを実施するのは初めてでした。日本NPOセンターと出会い、多くの方々と共に成長してきました。

プログラムの評価と言ってもさまざまな方法があります。たとえば助成事業の第1期では、助成先である母と子の虹の架け橋、吉里吉里国にSROI(Social Return on Investment)の調査へ協力いただきました。一方で、被災した方々のためのさまざまな活動に対して、特定の評価手法が合うのか、一概にまとめるのは難しいと考えています。実際のところは、事業を実施されてきたみなさまの達成感を、我々も同じように大事にしていきたいと思います。

田尻: 日本NPOセンターも震災 支援は初めてでした。助成事業の 公募を行うと、たくさんの応募があり ました。特に開始直後は競争率が 高く、十何倍ということもありました。 団体を選ぶのに、迷うことはありませ んでしたか。

吹田: 選ぶためには選考基準を 設定して点数化し、応募された事業 を比較して選考しました。選考に加 わった当初はどうしたらいいのか非 常に悩みました。しかし、当社の従 業員の目線を大事にしよう、一般の 従業員が、この団体を支援したらど う思うかを意識し、選考にあたってき ました。

田尻: 長沢さんも、選考委員として被災した方々や団体の側に立ちながらも、非常に難しい課題に取り組む事業や新しい取り組みへの実施体制の確実さなど、プログラム開始前には分からないことで、委員の意見が割れたときもありました。助成事業を選んだときのお考えと、2年、3年と継続して支援を続けるなかで感じられたことありますか。

長沢: 「正解はない」というのが本当に実感です。「正解がない」なかで、選考委員会の場で議論を戦わせて選んできました。通常の助成事業では、事業が始まれば団体にお任せするしかないのですが、このプログラムは伴走支援という形を取ったのが一つの大きな特徴だと思います。日本NPOセンターによる現地訪問や今日のような報告会のほ

か、継続助成の審査では団体の方 にプレゼンテーションしていただきま した。これらの機会で直接団体の想 い、考えを伺いながら、この団体に 本当に継続して助成すべきかどうか を判断できたのは、ほかの助成金に はあまりない組み立てだったと思い ます。選考委員でありながら、折々に 団体の方と触れる機会があったの はありがたいことでした。

田尻: 助成事業の選考は大変な作業です。限られた枠の中で選ぶため非常に難しい。

そんななかで5年やってきて、今日 の報告会では団体のみなさまにたく さんの成果を見せていただきまし た。期待に応えていただいたという 気持ちです。

#### 3. 第2期事業について

**田尻**: 続いて、第2期の事業を紹介します。

第2期を企画するにあたって、震 災が3年が経過した2014年から、被 災地支援活動と復興ニーズについ て調査を実施しました。本日、この調 査結果をまとめた報告書をお配りし ています。第2期はこの調査結果を 受けてプログラムを企画しました。ま ず第2期は現地のNPOを応援する ことを決めました。また、調査の結 果、震災をきっかけに設立された団 体は、資金が充分ではない、人材が 足りない等、組織の基盤を応援しな いといけないことが分かりました。こ のため、伴走型の支援を第2期でも 進めていこうと考えています。最後 に、国の復興予算は終了しつつある 中で、地域づくりのための行政の予 算がまだたくさんあります。このプロ グラムでは、上記に当てはまらない、 民間ならではの取り組みを応援した いと考えています。この現地のNPO への応援、組織基盤強化、民間なら ではの取り組みの3つは、第1期から 変わらず続けていきます。

第2期から新たに加わった内容と して、助成事業を2つのテーマで募 集します。

1つ目のテーマは、さまざまな NPOがつながって成果を追う協働 の実践です。このプログラムでは、団 体同士の協働がたくさん生まれまし た。一方で資金支援は、単体の団 体が単体の事業を実施するための 助成制度はありますが、複数の団体 が主体となって取り組む事業に焦点 を当てた助成プログラムはほとんど ありませんでした。そこで、第2期は このテーマで応援していくことを決 めました。この先、助成金や公的資 金が減少しても、協力しあうことに よって事業が続いていくきっかけを 作るのが一つの目的です。協働の パートナーは、行政、企業、NPOを問 いません。連携して行う事業を対象 としています。

2つ目のテーマは、住民のエンパワメントです。多くの活動が住民の主体性を尊重していると思いますが、今改めて発信することが大切だと考えています。これからは、「支援する側」と「支援される側」という関係だけではなく、支援を受ける立場だった人も何か一歩踏み出していく、そのきっかけづくりが必要である

ことが分かってきています。このテーマを応援することは、地元のNPOの人材育成にもつながるため、助成のテーマとなりました。

第2期の第1回助成は2016年12 月までに選考を終え、2017年1月から事業が開始しています。

自主連携事業も第1期に続いて 第2期も実施します。現状に応じた NPOの新しいチャレンジを応援して いこうと考えています。

日本YMCA同盟との連携事業である「東日本大震災における支援団体のメンタルケア事業」は、第1期から引き続いて実施します。この事業では、2014年から定期的に、「支援する人の心のリフレッシュプログラム」を開催しています。支援する団体のリーダー、スタッフの疲弊が大きく心のリフレッシュとケアを行う企画を専門家の方にも入っていただきながら実施しています。これまでに多くのリーダー、スタッフが参加され、評価いただいています。

第2期から新たに開始するのは、 組織基盤強化事業です。これは NPO経営ゼミとテーマ別研修の2 事業を展開しています。NPO経営 ゼミは、現地で活動するNPOのリー ダーたちに一年間共にしっかりと学 んでもらうものです。2016年度は宮 城県と岩手県で開催しました。各県 5団体の代表、事務局長が定期的 に集まり、自分たちで組織経営に関 わるテーマを設定して取り組みま す。リーダーはどなたも忙しいです が、全員が非常に熱心に参加され ています。講師を招きお話を聞いた り、東北、東北以外の活動の現場を 訪問し、自分たちの事業に取り入れ ていこうとしています。2017年度は 福島も加わり3県で実施します。

テーマ別研修は、リーダーだけでなく中堅スタッフから新人スタッフが力量をつけていくことを目指し、開催しています。運営・マネジメントに関わる研修とテーマ型研修に大別されます。第1期では「女性支援」、「食品」「ICT」をテーマとして開催、第2期に入り2016年は「リスクマネジメント」の研修を行いました。2017年3月には障害児・者の支援を行う全国の先進的な団体の現場へ視察に行きます。

以上のように、第2期は、助成事業、自主連携事業、組織基盤強化事業の3つの事業で現在の東北の状況に合ったチャレンジをしていきます。

第2期への期待について、長沢さん、吹田さんからコメント、提案をお願いします。

長沢: これまでの活動は、地域に 足しげく通ったり、地域に拠点を置く 等、行動観察によって公益的なサー ビスを提供、言わば「顧客を創造し てきた」と言えると思います。人びと のニーズを満たす活動は、使命をき ちんと定義することで事業内容が決 まります。一方で復興支援の活動 は、被災した方々の生活や地域の 状況の変化によって再定義をしなけ ればいけないという特性があると思 います。6年目を迎えるにあたって、 大きな変化が起こっています。例え ば、被災地を支援するお金の動きの 変化、福島は原発事故による避難 指示解除によって住民の方々が地 域に戻っていくという変化などです。 もう一度事業の目標を明確にしなけ ればならない時期に来ていると思い ます。

そう考えると、みなさまの活動をこ れからさらに深めるには、協働による 実践がとても重要だと思います。横 の連携、NPOはもちろん、企業、行 政など、目指す目標に関わるあらゆ る関係者(マルチステークホルダー) を引っ張り出して、同じ土俵に乗って もらうことが大事になってくるのでは ないでしょうか。このためにはこれま でとは異なる工夫や事業を行う上で の説得力も必要になってきます。同 時に、住民のエンパワメントをどうす るか、利害が必ずしも一致しない関 係者とどのような場をつくり合意形 成していくか等、さまざまなチャレン ジがあると思います。

みなさまがこれからチャレンジされ るのは、住民自身がまだ気づいてい ない次に地域で求められる新しい 需要を満たすイノベーションだと思 います。東北のみなさまがこれから 試みるイノベーションは、おそらくこ れから日本全国、どこでも直面する ことを先行して取り組んでいると自 信を持っていただき、地域だけでは なく、全国に発信していただきたいと 考えています。

吹田: 本日お配りした当社の CSRデータブック企業市民活動抜 粋版の25頁に、被災地支援の一覧 をまとめています。当社では、アリナミ ンという一般用医薬品の収益の一 部、1錠1円、1本1円を社内で積み 立て、3年間で31億円の原資を用意 しました。その原資による「日本を元 気に・復興支援 | プロジェクトにより 実施している12団体13プログラムの 中で、タケダ・いのちとくらし再生プロ グラムは最も規模が大きく、最も長期 に実施するプログラムです。CSR データブックをご覧になる方々、当社 の従業員が、復興支援のプログラム

について「このプログラムは、何を目 指し、何をしているのか |を問うのは 当然であり、我々も説明責任があり ます。そういうことから第2期は非常 に重要になってきます。

長沢さんがおっしゃったように、今 後は協働が求められます。協働と連 携、これは難しいことです。今まで自 団体や活動の裨益者のことを必死 に考えてきて、それに加えて、巻き込 む力をつけていなかければなりませ ん。他の団体と一緒にやっていかな ければこの先の限られた資源で やっていけない状況になってきてい ます。これも長沢さんがおっしゃるイ ノベーションの一つだと思います。ぜ ひ一所懸命考えていただいて、助 成事業へ応募いただければと思っ ています。

組織基盤強化事業は、みなさま の団体の取り組みが、より持続可能 になっていただきたいというメッセー ジです。ぜひこれらにも参加してい ただきたいと思います。

最後に、プログラムが10年終了し たときに評価というフィードバックをい ただき、1年目から10年間、どういうプ ログラムができたのかを日本NPOセ ンターには見せていただきたいと考 えています。

田尻: プログラムの評 価については、2018年 度、2019年度から作業 できるよう話し合いが始 まっています。被災地で はどんどん状況が変化 し、そのときどうだったの かをきちんと残していか ないと評価できないとい う話も出ています。みなさ まにもまたぜひご協力をいただきた いと思います。

長沢さんのおっしゃった、エンパワ メントをどうしていくのか。この機運 が現場でも出てきています。今まで の支援のやり方ではない、被災され た人自身も何か関わるとか、変わっ ていくとか、一歩踏み出すという支 援に変えていく時期に来ていると思 います。これまでに一緒に取り組ん でいなかった組織との連携や、住民 が主体となって事業が取り組まれる ことへの価値観の転換は長沢さん のおっしゃるイノベーションに繋がっ ていくと思います。いずれのテーマも タケダのプログラムの大きい柱であ り、それを実現するためにも、現地で 日々活動されているリーダー、スタッ フの育成のお手伝いができればと 考えています。助成事業だけでなく、 研修などにもぜひご参加いただけ ればと思います。

日本NPOセンターの本来の事業 は、NPOの活動の支援をしていくこ とです。助成を受けている、受けてい ないに関わらず、お困りごとや、情報 提供など、いつでもご相談ください。

以上、まとめとこれからということ で、お二人にお話をお聞きしました。 本日はみなさま誠にありがとうござ いました。





## 助成事業(第5回継続助成) 実施状況

2016年3月に助成期間が終了したのは、下図の11団体です。



## 第5回継続助成終了団体

## いのちの再生 (人道支援)

事業名/団体名	活動場所/団体所在地	助成額(万円)
仙台いのちの電話石巻分室での相談活動充実のための環境整備と 人材育成事業 /社会福祉法人仙台いのちの電話	宮城県石巻市/宮城	300
福島県の児童養護施設の子どもと職員の健康状況把握フェーズ2: 低線量被爆モニタリング検査とそのデータ蓄積のための健康手帳 電子化システム拡張版開発と普及 特定非営利活動法人福島県の児童養護施設の子どもの健康を考える会	福島県/福島	620
ふくしまの子どもの未来を豊かにする「自ら測り、考え、伝える」プロジェクト 特定非営利活動法人 ふくしま30年プロジェクト	福島県/福島	600
東日本大震災で大切な人を亡くした人々の心のケア活動 特定非営利活動法人仙台グリーフケア研究会	宮城県仙台市、石巻市 /宮城	306
福島で被災した子ども・若者・親子を対象とするチームによる ソーシャルワーク活動と居場所の提供 特定非営利活動法人ビーンズふくしま	福島県/福島	440

合計 2,266

## くらしの再生(復興基盤支援)

事業名/団体名	活動場所/団体所在地	助成額(万円)
ヨシ原を中心としたコミュニティ再生プロジェクト/里山共有プロジェクト 特定非営利活動法人りあすの森	宮城県石巻市/宮城	550
母と子の笑顔広げるママハウス 特定非営利活動法人母と子の虹の架け橋	岩手県釜石市/岩手	329
南相馬市における菜の花プロジェクトによる農業再生と地域活性化 特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部	福島県南相馬市/愛知	600
まちづくりを担う次世代育成と持続可能なくらし支援活動 特定非営利活動法人 故郷まちづくりナイン・タウン	宮城県南三陸町/宮城	551
ひとつの集落、ひとつの林場~薪が紡ぐ、なりわい・人・街づくり~ 特定非営利活動法人吉里吉里国	岩手県大槌町、釜石市 /岩手	600
避難し再開した福祉事業所の運営基盤確立のための人材確保と 移動支援の継続 /特定非営利活動法人コーヒータイム	福島県二本松市/福島	275

合計 2,905

総計 5,171



## 助成事業(第6回継続助成) 実施状況

2016年9月に助成期間が終了したのは、下図の5団体です。



## # 第6回継続助成 終了団体

## いのちの再生 (人道支援)

事業名/団体名	活動場所/団体所在地	助成額(万円)
「HELP!みやぎ」相談・フォローアップ継続、中間就労事業継続・発展、新規雇用創出事業継続・発展 特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ	宮城県仙台市/宮城	595

合計 595

## くらしの再生(復興基盤支援)

事業名/団体名	活動場所/団体所在地	助成額(万円)
被災者の就労支援と地域への配食サービス・高齢者見守り支援事業 一般社団法人ワタママスマイル	宮城県石巻市東部 (渡波地区)/宮城	675
生きがいから雇用へ(ゆめハウスからの広がり)プロジェクト 一般社団法人 コミュニティスペースうみねこ	宮城県女川町/宮城	564
観光羊牧場を核とした被災地域の活性と雇用創出を目指す活動 一般社団法人さとうみファーム	宮城県南三陸町/宮城	600
長面浦さとうら再生計画ーはまなすカフェからの挑戦 一般社団法人長面浦海人	宮城県石巻市長面浦と その周辺/宮城	332

合計 2,171

総計 2,766

<sup>(</sup>注) 助成額は、2016年9月末までに使用した助成金額(実額)とする。



## 仙台いのちの電話石巻分室での相談活動充実 のための環境整備と人材育成事業

## 社会福祉法人仙台いのちの電話

http://sendai-inochi.jpn.org/

■主な活動地域 : 宮城県石巻市

■主な支援対象 : 一般市民

## ■ 活動概要

当団体は精神的な危機に直面して助けや励ましを求めている人々を主に電話による対話を通じて支援している組 織である。被災地域の住民の心の健康の回復・維持・向上のために、本助成を利用して、宮城県石巻地域に分室を設 置し、相談員の増員と相談活動の充実強化を図った。助成1年目の石巻分室の電話相談件数は約1,000件だった。今 回の継続助成では相談活動の質と量を高めていくために、分室の環境整備に取り組むとともに、相談員養成講座や 広報・普及にも力を入れた。

### 1. 仙台いのちの電話・石巻分室の環境整備

深夜帯の担当者を含む相談員の心身の健康を維持し、24時間相談対応ができるように、仮眠用スペースや防音パネ ル、リフレッシュスペースなどを設置する。

#### 2. 相談事業の広報・普及

仙台いのちの電話の活動をより多くの住民に知ってもらうために、石巻の小中学校に連絡先を記したカードを配布す る。同時にチラシ、リーフレット、ポスターの配布や地元紙を通じた広報活動に注力する。

### 3. 相談員の養成

カウンセリングマインドを持って活動できる相談員の数を増やすための相談員養成研修を開催する。

#### 4. 公開講座

「被災地で支援する人のためのカウンセリング講座」~スキルアップ&リフレッシュ~



いのちの電話SOS新聞記事



被災地で支援する人のためのカウンセリング講座



分室の環境整備「防音パネル」

## 1. 仙台いのちの電話・石巻分室の環境整備

隣室の音の問題を解決するため、防音パネルを設置し、相談活動に集中できるようにした。危機的な相談もあるため、相談員が安定し、相談者の気持ちを受け止め、より良い対応につながった。また、深夜帯担当者が疲れを回復させるための仮眠スペースを設置した。折りたたみベッドを購入し、日中は担当者のリフレッシュやケア等に利用できるようになった。

### 2. 相談事業の広報・普及

仙台いのちの電話の相談案内番号のカードを石巻市教育委員会の協力で、石巻市の小中学校58校に12000枚を配布した。また、公開講座や相談員募集等の広報活動も石巻市内で行った。石巻市内での当活動の認知はまだ低いが、石巻市NPO支援オフィスに団体登録をして、市内の他のNPOの活動等の情報も得ながら地域のネットワークづくりを進めていく。

#### 3. 相談員の養成

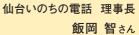
助成期間中に、40期及び41期の相談員養成講座を修了し、石巻で8名の相談員が認定された。また、42期、43期の募集を行った。2014年に14名の相談員で開始した石巻分室は、2016年3月末現在で17名の実働相談員によって活動し、電話相談件数は2014年の1000件から1400件に増加した。

### 4. 公開講座

2015年11月に「被災地で支援する人のためのカウンセリング講座」〜スキルアップ&リフレッシュを2回開催した。講座を通じて地域で支援活動を実施している人々に、心のケア、支援者の心のケアの重要性について啓発し、地域に根付いた住民相互の心の支え合いの醸成のための基礎知識やスキルの普及を目指した。

## Doice .

## 担当者の声





#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

石巻分室での相談活動は充実し、2016年の相談件数は1,206件だった。公開講座や相談員養成講座募集の地域新聞への情報掲載等で地域に周知されてきていると期待する。2016年に移転した新分室では相談員が積極的に運営している。

#### <見えてきたこれからの課題>

被災地域にカウンセリングマインドを持った人を増員していくという、被災地域の拠点としての役割を果たすため、相談員養成講座の受講生を確実に増やしていくことが今後の課題である。

## Doice

## 関係者の声

仙台いのちの電話 石巻分室 活動相談員 Tさん



#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

震災後、街も人々も言葉にならないくらい傷ついている中、何かしなければ・・という思いひとつで相談員養成講座に申し込みました。養成講座が石巻市での開催だったので、受講することができました。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

様々なケースを聴かせていただき、社会的な出来事を「私たちのこと」として強く関心が持てたことはよかったです。また10年来の仕事を辞めて、この4月から仙台いのちの電話の事務局の仕事に就くことになり、更にお役に立ちたいと思っております。

福島県の児童養護施設の子どもと職員の健康状況把握フェーズ2: 低線量被爆モニタリング検査とそのデータ蓄積の ための健康手帳電子化システム拡張版開発と普及

特定非営利活動法人福島県の児童養護施設の子どもの健康を考える会

http://www.fukujidou.org/

■主な活動地域 : 福島県

■主な支援対象: 福島県の児童養護施設の子どもと職員

## ■ 活動概要

東京電力福島第一原発事故による低線量被曝下にある福島県の児童養護施設の子どもと職員は、放射線量が高い地域から移動が自由にできず、公的な検査を受けられない状況にいた。当団体は、それらの子どもと職員に対して、長期的な健康管理のしくみを提供することで、低線量被曝による健康被害を予防し、早期発見することを目指して活動している。本事業では、児童養護施設の子どもと職員に対する包括的な健康管理の記録システムが構築され、運用されることを目指した。

#### 1. 健康手帳電子化システム拡張版導入

子どもの被曝による身体的影響と包括的な健康指標を記録するために独自に開発した健康手帳電子化システムと児 童養護施設の従来の児童支援記録と統合して互換性を持たせた「拡張版ソフト」を、県内施設に導入する。

#### 2. 健康手帳の卒園生への寄贈

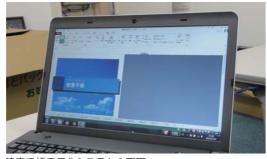
施設を卒園した人が将来にわたって健康状況や成長発達の記録を自分自身で把握できるように、卒園時に電子版をプリントアウトした「健康手帳」または紙版の「健康手帳」を贈る。

#### 3. 尿中セシウム検査の継続実施

内部被曝のモニタリング検査である尿中セシウム検査を幼児に実施するために、オムツによる採尿で検査を行いその検査結果を健康手帳電子版に記録する。

#### 4. 甲状腺エコー検査の継続実施

初期被曝のモニタリング検査である甲状腺エコー検査は、要請がある施設で在園児全員を対象に年1回の検査を継続実施する。加えて原発事故発生時に在園していた既卒者も継続検査できるように交通費補助を行う。



健康手帳電子化システムの画面



施設を卒園する直前の高校3年生に「健康手帳」を渡しながら放射能教育

## 1. 健康手帳電子化システム拡張版導入

2014年度に福島県内の6児童養護施設で導入した「健康手帳電子版」は子どもの被曝による身体的影響及び包括的な健康指標を電子化したソフトウェアだった。本事業では、「健康手帳電子版」に児童養護施設の従来の記録を統合して互換性を持たせた「健康手帳電子化システム児童支援記録付き拡張版」(「すこやか日誌」)を5施設で導入した。これにより職員の入力作業負担が軽減され、低線量被曝の指標となるデータの入力を確実に行うことに貢献した。また、「すこやか日誌」は、全国の児童養護施設でも注目されており、福島県以外からの購入を可能にした。

### 2. 健康手帳の卒園生への寄贈

健康手帳電子化システムでプリントアウトされた「健康手帳」あるいは紙版「健康手帳」を、2015年4月から2016年3月に卒園する児童36名(うち5名は紙版)、既卒の者3名に贈呈した。贈呈後の健康手帳の紛失予防のために、体温計とバンドエイドを合わせてプレゼントして、体温計には甲状腺エコー検査の継続受検を喚起する言葉を添えた。

### 3. 尿中セシウム検査の継続実施

尿中セシウム検査のオムツでの測定は1名だった。 尿検査と同時期に尿中に排泄される放射性物質の内部被曝経路を明らかにするために、「陰膳方式で食品中の放射能検査」を実施し、被曝低減のための生活改善につなげた。2施設で合計43食分実施した結果、検出下限が0.4~0.6Bq/Kgで、検出される食品はなかった。

## 4. 甲状腺エコー検査の継続実施

甲状腺エコー検査は、(2015年4月~2016年9月までに)3施設で実施し、157名の在園児童、12名の職員が受検した。卒園生も合計8名が受検し、うち7名に交通費を支給して、施設から自立した後も継続的に検査を受ける事を促すことができた。また、卒園生が検査を受けるために施設に来ることで担当職員や卒園生同士の交流ができ、意識啓発の機会となった。

## Doice .

## 担当者の声

福島県の児童養護施設の子どもの 健康を考える会 共同代表・事務局長 澤田 和美さん



#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

震災・原発事故から7年目の福島の児童養護施設で「被曝モニタリングデータを電子保存すること」が当たり前として定着してきたことです。甲状腺エコー検査は当初3施設が2017年現在は6施設で毎年あるいは隔年で実施しています。初期投入で大きな予算をいただけたのでスムーズに展開ができた事に感謝しています。

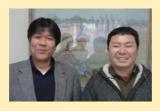
#### <見えてきたこれからの課題>

被曝防護や被曝モニタリングを今後も継続していくために、児童養護施設の職員不足の問題。これとNPO法人の活動をどうコミットしていくか、さらに本会の事務局の次世代育成が課題となっています。

## Doice.

## 関係者の声

児童養護施設 堀川愛生園 伊藤 信彦園長 齋藤 将樹先生



#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

当園が基督教団に関わりのある福祉施設でありクリスチャンである丸さん、澤田さんお二人の共同代表と繋がるきっかけになりました。その後、NPO法人として活動を通して職員、子どもがお世話になることができました。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

健康に関連した予防接種、通院・服薬記録などのデータが直ぐに探せること、手書き書類がなくなり事務作業が減ったことです。特に監査前の仕事量の軽減に繋がり、職員の仕事が楽になりました。半年に1回「健康手帳利用状況調査」が来るとやらなくちゃと思い、その後も繋がっている感覚があります。

## ふくしまの子どもの未来を豊かにする 「自ら測り、考え、伝える」プロジェクト

## 特定非営利活動法人ふくしま30年プロジェクト

http://fukushima-30year-project.org/

■主な活動地域 : 福島県

■主な支援対象: 福島県内の児童生徒および学生、健康不安を抱える保護者

## ■ 活動概要

当団体は、福島第1原発事故後に放射能測定を開始した「特定非営利活動法人 CRMS市民放射能測定所 福島」が前身で、時の経過とともにニーズが変化するなかで活動内容を広げて現在の名称に変更している。助成1年目は、放射能防護のセカンドオピニオンを提供するために、食品測定やホールボディカウンター測定を実施するとともに、「こども健康相談会」を県内外で開催した。助成2年目では、活動の軸を「こども健康相談会」や全国の避難者を対象とする「健康相談会」に移しながら、放射能測定も継続した。名称変更してから会員数も大きく増やしている当団体が、支持者や協力者の幅をさらに広げながら、「自ら測り、考え、伝える」活動を通して、福島で暮らす子どもたちの健康の確保を目指す。

### 1. 放射能測定セミナー・交流会

子育て世代の母親などを対象に放射能に対する日常の不安や疑問を相談できるセミナーを開催する。

### 2. 子ども向け放射能ワークショップ

子どもたちを対象に放射能についての学習会や測定体験プログラムを開催する。

#### 3. 流通食品の放射能測定

市場に流通する食品の放射能測定を実施して、福島で生活していくうえでの重要なデータを蓄積する。

#### 4. 空間線量の可視化と情報提供

子どもが安心して野外活動できるように、保育園や通学路など子どもたちの行動エリアを父母、保育士、教職員などの参加を得て、空間線量の測定をし、被曝の対策提言を市民とともに考える。



公園内の空間放射線量を測定し、可視化する



放射能ワークショップで測定をする子どもたち

## 1. 放射能測定セミナー・交流会

交流会はふくしまくらす交流会として主催、「みんなの家@ふくしま」等との共催を含め8回、セミナーは2回行った。

「福島産農産物についてJA新ふくしま菅野組合長と考える」「小児科医・山田真先生講演会『甲状腺・免疫力について聞いてみよう』」といった関心が高い交流会やセミナーはネット中継をしてアーカイブも残した。

自主避難から戻ったお母さんたちと現在の福島市の 放射能をテーマに行なった交流会では、蓄積した測定 データを有効に活用できた。教職員の交流会では、児 童が震災時に受けた心の傷が思春期になって及ぼす 影響とそのケアを中心に語り合った。

### 2. 子ども向け放射能ワークショップ

食品の放射能測定と空間線量測定の二通りのコースを用意した。1年に8回開催し、参加者総数は33名だった。子どもたちが実際に測定することで、五感に感じない放射能を空間線量計の音や数値によって実感できるようにした。特に、京都府の高校生からは、見学や測定体験で初めて福島県の現状を知ることができたという感想が多かった。

### 3. 流通食品の放射能測定

春から夏は野菜を中心に、秋からは果実を品目ごと に20~30件測定した。一般家庭での栽培が多い柿は、 流通品との比較により、セシウム低減対策をしない自家 栽培の果実の方がセシウムの数値が高く、果樹農家が 行っている低減対策の効果を見ることができた。

測定結果はニュースレターにまとめ交流会等で頒布 した。詳細なデータを提示し、数値がはっきりしたこと で、実際に食すかどうかの判断材料になるという評価 を参加者から得た。

### 4. 空間線量の可視化と情報提供

空間線量(以下、線量)測定の依頼が保護者、幼稚園、支援団体からあり、33件実施した。保護者の依頼は避難先から帰還した方が多数をしめていて、現在の線量に納得しての帰還ではないことがうかがえた。反面、避難をせず住み続けている方からの依頼が少なく、放射能についての意識の二極化が目標件数に達さなかった原因の一つと考えられる。

主な測定場所は通学路だったが、土手や神社・幼稚園・公園などの測定も行った。特に土手や神社の裏などは線量が高く、子どもが近づきやすい場所だけに参加した保護者も厳しい表情をしていた。幼稚園の測定では、線量が高い場所は一部分だけだったので掃除をして線量を下げ、測定と対策を同時に行うことができた。

子どもの外遊びを支援する団体からは、県外へ遊びに行く負担の軽減を目的に、県内の候補地検討のための測定依頼があった。測定時には、団体スタッフからの放射線や子どもたちへの精神的なサポートなどの質問にも対応した。

## Doice .

## 担当者の声

ふくしま30年プロジェクト 理事長 阿部 浩美さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

「みんなの家@ふくしま」と連携して『ふくしまくらす交流会』の開催ができたことで、避難から戻られた方など、それまでの交流会の参加者とは異なる、新しい繋がりを作ることができました。

#### <見えてきたこれからの課題>

想定したほど子ども向け放射能ワークショップへの参加が奮わず、原発事故からの時間の経過が関心の低下を招いていると感じました。これは、学校での放射線授業が年間2時間しかないことも関係していると思われます。

## Doice.

## 関係者の声

特定非営利活動法人ビーンズふくしま みんなの家@ふくしま 事業長 宮田 愛々



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

避難先から戻ってきた方や福島市へ避難してきた方を中心に、震災後の福島での生活について安心して話せる場として「ままトーク」を開催しています。きっかけは「放射線量を測って知りたい」という声が出たからです。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

ホットスポットファインダーや、掃除機のゴミパック内の放射能量など、測って知ることで安心したり、線量の高い所を避けるなどの手立てを考えることができて、福島での生活について考えるきっかけとなったようです。

## 東日本大震災で大切な人を亡くした人々の 心のケア活動

## 特定非営利活動法人仙台グリーフケア研究会

http://www.sendai-griefcare.org/

■主な活動地域 : 宮城県仙台市・石巻市

■主な支援対象 : 地域住民

## ■ 活動概要

東日本大震災では多くの人々が犠牲となり、不条理な死別の体験を余儀なくされた。当団体は、震災前からグリーフ ケア活動に取り組んでおり、震災以後は、大切な人との死別を経験して悲しみを抱えている人を対象に仙台市、石巻 市などで「わかちあいの会」を開催してきた。助成3年目となる今回の事業では、東日本大震災後5年を経て、仮設住 宅での避難生活を余儀なくされている方々、復興住宅へ入居し新たな地域の分断を経験した方々などの背景を踏ま えながらグリーフケア活動を継続実施した。同時に、これまでのグリーフケアの実績の積み重ねからスタッフ研修会 や公開講座、教育関係者向けの研修会などを開催することで、啓発、人材育成を強化した。

### 1. グリーフケア活動

大切な人との死別を経験して悲しみを抱えている人を対象にグリーフケアを提供するために、「わかちあいの会」を毎 月1回仙台市、石巻市、気仙沼市で開催する。

### 2. グリーフケアの担い手に向けた研修会

グリーフケアを支えるスタッフのスキル向上のために、スタッフ研修会を年4回程度開催する。また、医療関係者や教 育関係者がグリーフケアに関心を持って現場で実践が行われるよう、医療者向けおよび教育者向け研修会を開催す る。さらに「グリーフケア担い手養成講座」全10講を開講する。

### 3. 自死対策のための研修会

自死の減少を図るために、医療者向けの自死未遂者に対応するための研修会を開催する。



-フケアの担い手養成講座



わかちあいの会の会場

### 1. グリーフケア活動

「わかちあいの会」は仙台、石巻で12回、気仙沼で6回開催し、107名(男性36名、女性71名)が参加した。「わかちあいの会」に参加できない方もおり、そのような方向けに電話相談で対応。後日参加に至るケースも多い。震災から時間が経ってもなかなか話せない方も多く、また話すタイミングを逃し、震災後の心のケアには長期的な時間が必要であると考える。

養成講座を開催し、一定の必須講座を受講された参加者が、「わかちあいの会」の受付スタッフとして参加。 今後はファシリテーターの一員として活躍して頂けるよう期待している。

## 2. グリーフケアの担い手に向けた研修会

グリーフケアの啓発・普及としての「グリーフケアの担い手養成講座」の第1期(全10講)を実施し、各講10名程度の参加者を得た。参加者は、医療関係者のほか、地域の行政関係者、葬祭業者、宗教者、会社員など多様で、グリーフケアに関心を持つ人々が社会のいろいろな場で活動していることを物語っている。受講者は、グリーフケアの専門家の講話を聞き、仙台グリーフ

ケア研究会でしかできない実践体験として「わかちあいの会」へも参加し、個々の大きな成果に繋がった。また、わかちあいの会の質の向上を目的とし、スタッフ研修会を開催した。

学校におけるグリーフケア教育として「子どもと共に考える『命の授業』綴ることは生きること」と「未来を生きる子どもたちを育む」をテーマに教育関係者向けのワークショップを2回開催し、47名の参加者を得た。

### 3. 自死対策のための研修会

医療者のための自死未遂者に対応するための研修会を開催し、医療関係者17名の参加を得た。今年度は、特にうつ病と自殺未遂者対策に注力した。前述の研修会も含め、医療関係者の参加が徐々に増えてきており、医療現場のグリーフケアへの意識は高まりつつあると考えている。

## Doice .

## 担当者の声

仙台グリーフケア研究会 理事長 滑川 明男さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

グリーフケアの担い手養成講座を開催したことで、修了生がスタッフとして「わかちあいの会」に参加。また、多くの方から学びたいという問い合わせがあり、これまでにはない変化である。

#### <見えてきたこれからの課題>

事業を実行するためのボランティアや、事業を企画運営 する人材の確保、及び、助成金に頼らずに資金を調達する ことが、活動継続のための課題である。

## Doice

## 関係者の声





### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

人知れずグリーフを抱えた方が身近にたくさんいて、私もグリーフを経験しました。こちらの活動を知り「グリーフケアの担い手養成講座」を受講し「わかちあいの会」のお手伝いもさせて頂いております。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

グリーフはみな違う事、寛容でいる事を学習し、お檀家さんのお話も落ち着いて聴けるようになりました。また様々な分野、職種の方々の中での学習や「わかちあいの会」に参加する事で多様な価値観に触れる事ができました。

## 福島で被災した子ども・若者・親子を対象とする チームによるソーシャルワーク活動と居場所の提供

## 特定非営利活動法人ビーンズふくしま

http://www.beans-fukushima.or.jp/

■主な活動地域 : 福島県

■主な支援対象 : 東日本大震災および福島第一原発事故により被災した、福島県内に居住する

小学校1年生から35歳程度までの子ども・若者とその保護者及び家族

## ■ 活動概要

当団体は、福島県福島市で、不登校やひきこもりの子どもや若者のために一人ひとりが自分らしく生きていけるように支援を行なっている組織である。助成1年目は、福島で被災した子どもや若者を対象に、同行サポート、訪問サポートならびに「こころの相談室」での心理臨床的支援に取り組み、支援対象者や家族に寄り添い信頼関係を築きながらサポートしてきた。助成2年目は、「親の会」や仮設住宅での個別相談支援など新しい取り組みも交えながら、達成目標を掲げて前年度事業を基本的に引き続いて実施した。3年目となる今回の継続助成では、対象者や家族が広く繋がれる参加機会の提供や専門スタッフの有機的な連携による支援サービスの質向上など、これまでの活動を通して見えてきた課題の解決に取り組む。

### 1. 同行サポート(ケースワーク)

支援対象者に対して居場所担当スタッフやケースワーク担当 スタッフなどそれぞれの専門性を持った複数のスタッフによ る個別相談を実施する。希望に応じて支援機関を紹介し、案 内、同行を行う。

#### 2. 訪問サポート(アウトリーチ)

対象者の状況に応じて学校や自宅をケースワーク担当スタッフが訪問するなど、対象者が安心してサポートを受ける環境づくりを行う。

#### 3. 原発事故被災者を対象とする心理臨床的支援

仮設住宅、借り上げ住宅居住者など一定の要件を満たした、不 登校・ひきこもり・無業状態の子どもや若者、およびその家 族を対象に、心理臨床的支援を行う。

### 4. 居場所への接続機会の提供など

対象者やその家族に対して、安心して継続的に関われる居場所(フリースクールや親の会)への参加機会を提供する。これらの事業の理解促進のための広報活動や地域・行政への働きかけを強化する。



居場所活動にて畑作業を行う若者



対象者を中心に据えたケース検討会

## 1. 同行サポート(ケースワーク)

それぞれの専門性を持った複数のスタッフが支援対象者に関わることで、ケースワークが必要と思われたケースのうち約73%が当団体の支援事業、あるいは外部支援機関につながり、支援をうけることができた。(働きかけを行っているケースを含めれば90%以上の支援対象者が、支援に接続された。)

## 2. 訪問サポート(アウトリーチ)

スタッフが対象者の状況に応じて自宅や学校を訪問した。また、ケースワーク担当スタッフが必要に応じて居場所での活動に参加し、対象者との関係性を作るなど、対象者が安心してサポートにつながれるよう取り組みを行った。その結果、のべ127名のスタッフが、他の居場所への活動に参加し、対象との信頼関係づくりに努めることができた。

## 3. 原発事故被災者を対象とする心理臨床的 支援

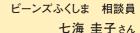
補助の対象となる不登校や引きこもり、無業状態にある子ども・若者及びその家族を対象に、当団体「こころの相談室」面談料金の補助を行い、計160回の無料相談を実施した。この「まめの木プロジェクト」を利用した人の中では、心の整理がつき、新しい生活へ目を向けられるようになった人や、自身には継続的なカウンセリングが必要であると気づいて有料の相談へと移行した人がいた。

### 4. 居場所への接続機会の提供など

対象者やその家族が地域で孤立しないよう、継続的にかかわり続けることのできる居場所(フリースクールや若者の活動、親の会など)への参加の機会を提供した。参加に当たっては本人の意思を尊重し、強制的な参加とならないよう留意した。その結果、約45%が継続利用に至った。一度居場所につながった後も、複数のスタッフが面談その他の方法で対象と関わって様子を見るなど、継続的につながっていけるようサポートしている。

## Doice

## 担当者の声





### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

事業の枠組みを超え利用者に添った団体内外の支援を 集めていくことができたこと、スタッフが利用者を連れて 他事業の活動に出向くことが増えたことで、利用者の活用 できる支援の幅が広がったと思います。

#### <見えてきたこれからの課題>

これまでの連携は、支援機関が「利用者を渡し合う」ことになりがちでした。複合的な悩みや希望を抱える利用者に「添った支援を増やす」という視点が必要だと実感しました。この視点が広がるよう活動を継続していきます。

## Doice

## 関係者の声



利用者のRさん

#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

就職活動に一歩踏み出せずにいた時、こころの相談室を紹介されました。相談以外にも通える場所が欲しいと思い、ユースプレイスの活動にも参加しました。そこから制作活動の講師や、体験談を話す機会もできました。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

ユースプレイスで同じような体験をしたメンバーとしゃべれたことです。悩んでることも否定されず、「あるある!」って話せるこの空気が好きです。少しずつ自分に対して肯定的になり、気持ちも楽になりました。



## ヨシ原を中心としたコミュニティ再生プロジェ クト/里山共有プロジェクト

## 特定非営利活動法人りあすの森

https://www.riasnomori.jp/

■主な活動地域 : 宮城県石巻市

■主な支援対象 : 地域住民

## ■ 活動概要

当団体は、自然体験を通じた宮城県石巻地域の再生支援、社会教育の推進や、里山空間づくりによる環境保全など に取り組んでいる組織である。助成1年目は、馬によるアニマルセラピーや里山体験活動などを行い、主に被災した子 どもたちや障害者が動物や自然に触れ合うなかで心と体の元気を取り戻す機会を提供してきた。参加者は年間延べ 約1000名であった。今回の継続助成では、広く石巻市の被災者を対象に地域の人々の心の原風景ともいうべき北上 川河口のヨシ原と地域コミュニティの津波被害からの再生と里山空間共有のプロジェクトに取り組み、地域住民の 復興を目指した。

### 1. ヨシ原を中心とするコミュニティ再生プロジェクト

東日本大震災による地盤沈下の影響で面積の半分を失った北上川河口のヨシ原の再生を目指すための体験型啓発イ ベント(ヨシ刈り、ヨシ舟づくり、紙すき)を行う。また、これらの活動への地域住民の参加を促し、被災コミュニティの 再生をはかる。

### 2. 里山空間共有プロジェクト

豊富な自然資源を持つ北上地域の特長を生かし、地域会員とともに子ども・親子向けの里山活動を行い、植付け、山 菜採り、たけのこ掘り、稲刈り、収穫祭、芋煮、餅つきなど、地域資源を体験できるプログラムを実施する。



蓋刈体験



紙すき

## 1. ヨシ原を中心とするコミュニティ再生プロ ジェクト

地域の自然や文化に親しむ機会が少なくなっている 石巻市の子どもたち約500名に対して、ヨシ舟づくりや ヨシ刈り、紙すき体験などを10回実施し、ふるさとの自 然に親しむきっかけを提供した。特に北上小学校にお けるヨシ紙の卒業証書は地域の大事な文化になってお り、本プロジェクトを象徴する活動である。

また人口減少の著しい石巻市北上町において地域外との交流人口増加を目指し、冬の風物詩となってきた大規模ヨシ刈り体験会を2回実施した。参加者は関東、関西、宮城県内など多様でリピーターも増えており、地域内外の人びとによるヨシ原コミュニティ形成が促進された。こうした継続的なイベント開催と情報発信を通じてヨシ原再生に関する啓発を行うことにより、保全への意識が高まった。

かさ上げ工事を要望する啓発事業に関しては、2014年11月に国土交通省に提出したヨシ原再生の陳情署名(7千8百余名)について継続的に行政に働きかけを実施してきた。この結果、活動実績が認められ、2016年3月に国土交通省の河川協力団体の指定を受け、河川維持管理活動の委託を受けることが可能になった。

## 2. 里山空間共有プロジェクト

豊富な自然資源を持つ北上地域の特長を生かし、前年度を踏襲し、地域会員とともに子ども・親子向けの里山活動を行い、植付け、山菜採り、たけのこ掘り、稲刈り、収穫祭、芋煮、餅つきなどの体験プログラムを11回実施し、506名が参加した。

活動の主要メンバーの退任に伴い、活動内容の変更を余儀なくされたが、新体制のもと昨年度に引き続き実施した夏休み2泊3日親子サマーキャンプでは、地域からの協力を得て、馬の世話、乗馬体験、野菜の収穫、カレー作り、さらに茅葺き屋根ふき体験、漁師漁船体験などを行い、里山と連動して地域資源を体感できるプログラムに広がりを持たせることができた。

理事・会員をはじめとした関係各者の協力のもと、馬との触れ合い体験や稲刈り、芋煮会、餅つきなどの主要活動を継続し、リピート参加者を確保する事ができた。参加者からは心のケアに非常に役立つとして活動継続の要望が強く、200人以上の参加者を得る事ができ、地域に必要な里山体験の場として引き続き維持していく体制ができた。

## Doice

## 担当者の声





#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

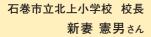
震災後に取り組んだヨシ原再生プロジェクト事業を通して、より多くの方々と緊密な連携ができ、北上川のヨシ原の大切さを知って頂けたと思っている。また、児童・生徒のヨシ原をフィールドにした体験活動を通じて、環境学習や豊な心を育むことができたと思っている。

#### <見えてきたこれからの課題>

震災に伴う急激な人口の減少傾向は、地域を担う児童・生徒の減少とも相俟って、今後の活動にも懸念があることから、学校や関係団体とより連携を図り、豊な自然をモチベーションに地域づくりの一端も担える活動の展開が必要と思う。

## Doice.

## 関係者の声





#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

本校では、総合的な学習の時間に地域に自生する葦を題材とした体験活動を行っています。5年生では、NPO法人りあすの森の支援を頂き、葦刈り体験や刈り取った葦を使用した紙すき体験を行い、卒業証書を作成する学習を行っています。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

- ・初めて葦刈り体験をして、葦がとても長く、刈り取るのが 大変でした。その葦から和紙ができるなんて驚きです。 (児童の声)
- ・紙すき体験では、平らに紙をすくことが難しかったです。 卒業式で自分ですいた葦和紙の証書をもらえるのが今 から楽しみです。(児童の声)



## 母と子の笑顔広げるママハウス

## 特定非営利活動法人母と子の虹の架け橋

http://nijino-kai.org/

■主な活動地域 : 岩手県釜石市

■主な支援対象 : 妊産婦含むママと乳幼児

## ■ 活動概要

当団体は、震災直後に被災妊産婦をケアすることから活動をはじめて、赤ちゃんを育てるママを支えるために釜石 市で「ママハウス」を開設して多彩な取り組みを地道に展開している。助成1年目では、母と子の笑顔を広げるために サロンや各種講座を開講し、前回の継続助成では、ママの自立を支援することを目的に就労支援やキャリア形成、意 欲向上のためのプログラムなどを実施した。今回の継続助成2年目では、これまでの活動実績を踏まえながら、地域 の諸団体との連携・協働に配慮して、女性の発信・行動・連帯を支援する「ママハウス」事業をさらに推進した。

### 1. 発信・行動・連帯する女性をささえる「ママハウス事業」

女性の自立・自律を支え、担い手を養成する講座(保育者養成講座、相談員養成講座、起業家支援塾など)や心身のリ ラクゼーション講座、生活潤い講座を開催する。他のNPOとの共同企画・開催に注力し、スケールメリットを図る。

### 2. こども・女性を地元コミュニティで支える協働事業

「ママハウス」を中心にママと子どものための豊かな子育で環境づくりに取り組む。小中学生の学習支援団体や、子ど もの遊びと学びの支援に関わる団体と連携し、こどもの心と身体の育みを支援する。他団体との連携による女性支 援の仕組みづくりとして「女性会議」の立ち上げを目指す。



スキルアップ講座(パソコン講座)



保育者認定講座

## 1. 発信・行動・連帯する女性をささえる 「ママハウス事業」

- ①担い手養成講座の実施:のべ335人が参加
  - ・起業家支援塾(入門編・基礎編)を開催した。参加者: 14人
  - ・保育者養成講座基礎研修(講座24時間、実習2日間)を開催した。参加者:のべ115人
  - ・保育者養成講座認定研修(講座40時間、実習2日間)を開催した。
  - ・パープルリボン(※)サポーター養成講座(カリタス釜石との共催)を開催した。 受講者22名 (※女性に対する暴力や虐待を根絶するための運動。)
  - ・女性相談員養成講座(3日間)を開催した。参加者: のべ52人
- ②暮らしのスキルアップ講座(手帳café、英会話、PC講座、会計・経理講座)を開催した。
- ③ 心身ケア・リラクゼーション活動を実施した。(フットケア・デコルテケア、ママハグ親子ヨガ、ママのためのヨガ、アロマハンドトリートメント、ベビーダンス、 鵜住居キッズダンス)

## 2. こども・女性を地元コミュニティで支える協働事業

① 平田放課後子供教室MOSICAの実施:

2015年10月より、岩手県営平田災害公営住宅集会所にて釜石市教育委員会が主導し、釜援隊、いっぽいっぽ岩手、ママハウスの3団体が協力して、平田放課後子供教室MOSICAを毎週水曜日に開催し、小学生の放課後の居場所作りを支援した。ボランティアも多数参加して、外では鬼ごっこや縄跳び、室内は、オセロ、卓球、お絵描き、ぬり絵など、季節ごとにはイベント行事も企画し、公営住宅に住むお年寄りの方々の協力も得て、世代を超えた活動をしている。参加人員はのべ290人だった。

#### ② ボランティア受け入れ活動:

読み聞かせ+ $\alpha$ の会(ママ33人・子ども29人)、親子パン教室(ママ33人・子ども29人)、食育セミナー(ママ3人)、クッキングサロン(ママ21人・子ども21人)、ミシンレッスン(ママ4人・子ども5人)

## Doice

## 担当者の声

### 母と子の虹の架け橋 前理事長 若菜 多摩英さん



## <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

被災地での保育の待機は許せず、保育者養成講座(基礎講座と認定講座)を延べ13回・受講生は延べ214名が受講し、保育の人材育成を果たし、岩手県で第1号ともいえるC型とB型の小規模保育所の法人開設が実現した。

#### <見えてきたこれからの課題>

ママハウスは震災の年の9月25日に釜石に開設した。以来、4年間の活動期を経て、ママハウスの利用者が担い手(ママサポーター)になり、事業目標の設定も主体的となり、自立した活動が育ち、今後の広がりが期待できる。

## Doice

## 関係者の声



遠藤 由佳さん

### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

震災後、二人目を妊娠・出産。育児に疲れて本当に苦しんでいる時に、ママハウスさんに出会いました。同じように思っているママ。相談にのってくれるスタッフの皆さんのお陰で、すごく心が救われました。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

色々なイベントを通して、たくさんのママ達と交流でき、 フリーマーケットなどで仕事の大切さなど学びました。ママハウスさんは、本当に私にとっての支えになりました。ありがたい気持ちでいっぱいです。



## 南相馬市における菜の花プロジェクトによる 農業再生と地域活性化

## 特定非営利活動法人チェルノブイリ救援・中部

http://www.chernobyl-chubu-jp.org/

■主な活動地域 : 福島県南相馬市

■主な支援対象 : 地域住民

## ■ 活動概要

当団体はチェルノブイリ原発事故の被災地救援を目的に設立された組織。東日本大震災の被災地支援では、放射 能測定に取り組みながら、ウクライナで実施し成果をあげた農業再生の経験を生かして「菜の花プロジェクト」に取 り組む。助成1年目は「菜の花プロジェクト」の本格展開のために汎用コンバインを購入。ナタネ種子を収穫して食用 ナタネ油を生産・販売した。ナタネ油は放射能汚染の影響がなく、安全な食品加工商品が作れることが判明したた め、作付面積は、2013年の13.5haから2015年には42.5haまで拡大した。今回の継続助成ではナタネ種子の乾燥装 置と自動播種機の導入により、地元耕作地の拡大ニーズに対応し、プロジェクトの大規模化を進めた。

#### 1. ナタネ種子の乾燥施設設置

梅雨期に収穫する大量のナタネ種子の品質劣化を防ぐために、粗選機とナタネ種子乾燥機を購入して、南相馬市に 「ナタネ種子乾燥施設」を設置し、高品質のナタネ油づくりを効率的に行う。

### 2. 自動播種機の導入

限られた播種期間に大規模な播種を速やかにかつ効率的に行うために自動播種機を購入する。

## 3. 搾油工場建設など

ナタネ栽培から搾油やバイオガスまでの全てを南相馬市で行うナタネの6次産業化を視野に、搾油工場の建設用地、 油粕を活用するバイオガス装置設置場所について検討する。



ナタネの種まき会



相馬農業高校生と杉内さん

### 1. ナタネ種子の乾燥施設設置

本助成金と一般寄付、南相馬市補助金により、ナタネ種子乾燥機を購入、乾燥機を設置する大型テントハウスを設置した。これにより、2015年6月以降に収穫したナタネ種子を短期間で乾燥し、同時に購入した粗選機によってごみとの選別も効率化し、前年度のような湿気による廃棄はなくなった。これを搾油し、270g(300ml)の菜種油約10,000本相当分を商品化(商品名「油菜ちゃん」で商標登録)し、一部はマヨネーズにも加工し、販売している。また、英国に本社のある環境問題に関心の高いLUSH Ltd.の日本法人株式会社ラッシュジャパンの希望により、油菜ちゃんを石鹸に加工し、2016年3月から国内販売を開始した。LUSHとしては国際的にも販売したい希望で、今後もナタネの生産規模拡大のニーズが期待できる。

## 2. 自動播種機の導入

ナタネの播種面積増加(2015年度は42.5ha)に伴い必要となった大型播種機を購入し、効率良く播種することが出来た。

### 3. 搾油工場建設など

これまでナタネ油の搾油は、栃木県の「グリーンオイル・プロジェクト」に委託していたが、2016年度以降は、ナタネの搾油を南相馬で自力で行うための搾油工場建設を計画しており、南相馬市下太田区内の工業団地を選定し南相馬市に用地確保の申請を行った。また、大阪や北海道の大型搾油工場も見学し、搾油機の選定と見積もりを行った。2016年度内に用地の確保をしつつ、搾油装置の設計や工場建物の設計等の準備を行い、県市との打合せを重ね2017年度内に搾油工場の完成を目指していく。同時に油粕を活用するバイオガス装置設置を引き続き検討し、南相馬市におけるナタネの6次産業化を目指す。

## Doice

## 担当者の声

チェルノブイリ救援・中部 理事神谷 俊尚さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

南相馬市における菜の花プロジェクトが定着し、栽培面積も2013年には13.5haだったが、2016年の栽培面積は72haにまで拡大した。ナタネ油に放射能汚染がないとわかり、食用油だけでなくマヨネーズやドレッシング、石鹸やスキンケア・クリームなどの商品化も進んだ。

#### <見えてきたこれからの課題>

栽培面積とナタネの収穫量の増加に伴い、商品の販路拡大が大きな課題になりつつある。また、南相馬市における高齢化に伴い、農作業を行う人材の不足も今後問題になる。

## Doice

## 関係者の声

一般社団法人 南相馬農地再生協議会 代表 杉内 清繁さん



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

NPO法人チェルノブイリ救援・中部がウクライナの汚染地域で菜の花プロジェクトを行ったことを講演会で知り、南相馬でも行いたいと考え、コンタクトを取った。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

原発事故後、放射能汚染問題と向き合い、日常生活に欠かせない食料の安全性の確認、復興に向けて積み上げてきた日々の中で、寄り添ってくれる多くの皆様の温かさは困難に立ち向かう強さを与えてくれる糧のように思います

## まちづくりを担う次世代育成と 持続可能なくらし支援活動

## 特定非営利活動法人故郷まちづくりナイン・タウン

http://nine-town.org/

■主な活動地域 : 宮城県南三陸町

■主な支援対象 : 南三陸町歌津地区住民

## ■ 活動概要

当団体は、市民・企業・行政・学校などが持つ力を結び付け、「協働のまちづくり」を実践している宮城県登米市の 組織。震災直後から南三陸町へ支援に入り、地域内循環型経済を目指した復興に力を入れている。助成1年目は、南三 陸の海・山・里の特産品を取り入れて新規に商品化することや、そのための地元人材の育成と組織力強化に取り組ん だ。今回の継続助成では、これまでの活動をベースに、これからのまちづくりの主役・牽引者は地元の若い世代であ るとの認識の下に、若手の人材育成と連携NPOの基盤強化に力を注いだ。

### 1. 次世代若手人材育成

農漁業、商業、工業、観光業など異業種の若手からなる「南三陸次世代若手部会」を立ち上げ、地元の若者世代を対象 に町づくりに関する講義、ワークショップを年12回開催する。若者が取材、編集に携わる形で地域密着の情報誌を年 4回発行する。

### 2. 異業種をつないだ仕事創出

地域の特色を生かした新商品(5種)を開発し、6次産業化のモデルにし、南三陸直売所での販売と各地の出張販売を 行う。交流拠点の「南三陸みなさん館」を活用促進して、地域との交流と外部との連携を図る。



青年部員成果発表 地域リーダー会議にて



青年部宝BOOK編集会議

### 1. 次世代若手人材育成

地元住民によって設立された特定非営利活動法人 夢未来南三陸と連携して、当法人を地域活動の拠点と 位置づけ組織基盤強化の支援を行った。組織内には、 異業種の若手男女による「夢未来南三陸青年部」を立 ち上げ、10名の若手人材が集まった。青年部では、若 手人材を対象としたワークショップを10回開催し、ファ シリテーションスキルや課題解決能力の向上に努め た。同時に夢未来南三陸まちづくり事業部を設置して、 地域全体のまちづくりに対応し、世代間のコミュニケー ション、知見の継承を促進するしくみを作った。さらに、 まちづくり事業部の定例会(11回開催、のべ390名が 参加)と青年部を融合して、地域内人材のネットワーク 化の拡充を図った。まちづくり事業部と青年部のメンバ ーを中心として、南三陸歌津グランドデザインが作成さ れ、地域の意見集約機関として機能した。青年部員は 地域情報誌「一燈」や地元資源PR誌「南三陸宝 Book」を編集・発行し、地域の情報発信と意識向上に 貢献した。

## 2. 異業種をつないだ仕事創出

地域の特色を生かした試作商品12品、試作飲食メニュー30種類(煮豆、新生姜の甘酢漬け、ほやのトマト巻、タコ入りオムライスなど)を開発し、販売促進活動を行った。

NPOや青年部構成員の特産品販売による販売拡大 プログラムを18か所で31日間実施し、225万円の外販 実績を得た。

## Doice

## 担当者の声

故郷まちづくりナイン・タウン 事務局長 伊藤 寿郎さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

編集や会議でワークショップを常用したことは、各々の 仕事や特産品、歴史や自然環境など、一般化している事象 を容易に可視化でき、新価値創りを体感できた。その後も 改訂を加えることで更に活用性が高まっている。

#### <見えてきたこれからの課題>

①人材育成は長期の取り組みが必要。②地域リーダーを支える仕組み。③地域暮らし時間への対応。これらの活動は無償の地域活動では為し得ず、地域経済を生み出す活動と一体になって実施されることが重要。

## Doice

## 関係者の声

南三陸直売所 みなさん館 館長 小野 勝良さん



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

震災直後、炊き出し・物資支援などの緊急支援からのお付き合い。今は被災地の人材育成やなりわい支援やコミュニティ構築など多様な支えをいただいて感謝しております。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

現地に直売所や農産物加工場を作って、運営するNPO 法人を一緒に立ち上げたことは、これからの地域づくりの 参考になります。これからも活用してまいります。

## ひとつの集落、ひとつの林場 ~薪が紡ぐ、なりわい・人・街づくり~

## 特定非営利活動法人吉里吉里国

http://kirikirikoku.main.jp/

■主な活動地域 : 岩手県大槌町、釜石市

■主な支援対象 : 地域住民

## ■ 活動概要

当団体は、大槌町吉里吉里地区を愛する人たちが、津波災害復興に向けた新たな雇用創出と経済復興に関わる地 域主体の取り組みを行なっている組織である。助成1年目は、「復活の森」再生をキーワードにして、森林資源の有効活 用、木質・木材の有効活用、さらには森林教室の開催などによる森林空間の有効活用に取り組み、建築用丸太材や薪 の売上などで販売成果を挙げた。また「おおつち自伐林業振興会」を立ち上げて、入会者数約40名を迎え山林面積も 45haに広げ、集落営林組織体の第1歩を踏み出した。助成2年目の継続助成では、「おおつち自伐林業振興会」の会員 数・作業森林面積ともに拡大させて森林整備をさらに推進した。木材資源の活用では、間伐材の販路拡大や木質バイ オマスの普及促進などに一層力を入れて、副業型自伐林業を着実に推進した。

#### 1. 森林整備事業

刈払い、枝打ち、間伐、作業道づくりなどの森林保全整備活動を継続実施する。活動の組織体である「おおつち自伐林 業振興会」への入会促進にも力を入れ、自伐型集落営林事業の基礎固めを行う。

#### 2. 木材資源有効活用事業

建築用丸太材や残材(チップ燃料材、薪材)の商品づくりと販売を行う。木質バイオマス燃料の普及、拡販活動に取り 組む。

#### 3. 人材育成・啓発事業

「林業学校」を年12回開催して、チェーンソー取扱講習会や刈払機取扱講習会を開催し、資格取得者を増やして副業的 自伐林業者を5名養成する。「森林教室」を年8回開催して、町民が森と共存する文化を大切にする機会を提供する。



伐倒体験 次代を担う人財育成(森林教室)



森林放置材の有効活用(薪生産事業)

### 1. 森林整備事業

- 「おおつち自伐林業振興会」会員が、40名から55名に増加した。
- ・森林保全整備の作業実施面積が40haから49haに 拡大した。
- ・作業道(路網整備)の幹線路が290m開設された。
- 森林経営計画を策定するノウハウを取得した。

## 2. 木材資源有効活用事業

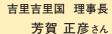
- 建築用丸太材販売:建築用丸太材の販売、270㎡・ 200万円を達成。
- 残材(チップ燃料材)販売:8.5万円
- ・残材(薪材)販売:薪の販売、50t・250万円を達成。
- 薪ストーブの導入5軒。熱供給事業見学説明会7回 開催。

### 3. 人材育成・啓発事業

- ・林業学校の開催:年間12回開催。地域内でのチェーンソー取扱い資格取得者を20名(延べ200名の参加者)増やし、副業的自伐林家を5名養成した。
- ・森林教室の開催:年間8回開催(延べ200名参加)。
- ・各種イベントの開催:「歌声まつり」「薪まつり」「山神まつり」を開催し、地域の人々の交流の場を提供し、コミュニティの再生に寄与した。

## Doice

## 担当者の声





### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

集落営林事業の活動現場をさらに拡大し、永続できる 副業的自伐林業の拡充に道筋を見出した。また間伐材から薪を生産し、その有効利用から地域を担う人材育成・地域活性化が確実に視野に入ってきた。

#### <見えてきたこれからの課題>

自主事業での収入拡大や雇用の安定を図ること、円滑な事業展開のための事務局体制の強化。また森林資源等に関する啓発・啓蒙活動を、地域住民だけでなく行政部門をも含めた、より幅広い活動につなげること。

## Doice

## 関係者の声

岩手県大槌町立大槌学園 校長 松橋 文明さん



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

東日本大震災発生直後から現在まで、吉里吉里国とは 被災地復興のため励まし合いながら共に働いてきた。同じ 町民として、地方創生のモデルとなり得る活動をこれから も展開して欲しい。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

人材育成・各種イベント行事に参加された地域住民(特に子供たち)の笑顔から、明日への復興まちづくりの希望を頂いた。地域の子供たちがこの街に住みたいと思えるような活動の継続を願う。



# 避難し再開した福祉事業所の運営基盤確立のための人材確保と移動支援の継続

## 特定非営利活動法人コーヒータイム

http://www.coffeetime.jp/

■主な活動地域 : 福島県二本松市

■主な支援対象 : 福島第一原発事故に関する避難障害者及び避難先(福島県二本松市、福島市、郡山市、

および本宮市)で生活する障害者

## ■ 活動概要

当団体は、福島第一原発事故により福島県浪江町からの避難を余儀なくされた障がい者と、避難先で新しく加入した通所メンバーの生活を安定させ、障がい者が避難先でも尊厳をもって生きていけることを目的として活動している。これまで避難先の福島県二本松市で、作業所を新設し、震災以前に浪江町で運営してきた喫茶店「コーヒータイム」を市民交流センター内にオープン、通所者の送迎支援を行うなど、避難障がい者の生活再建や日中環境の整備に取り組んできた。本助成では、利用者の増加に対応するため、事務所・作業スペースの確保や送迎体制の拡充、現在の喫茶店をより地域に根差したコミュニティカフェとして運営してゆくことを目指し、避難してきた障がい者だけでなく、地元二本松市や近隣から通所している障がい者にも、安定した生活基盤を提供することを目指す。

#### 1. 専門職雇用による就労継続支援事業所の基盤強化

喫茶店「コーヒータイム」と作業所「金色事務所」の通所率を65%から75~80%に高めるために、通所者にきめ細かく相談対応ができる専門職(精神保健福祉士など)を採用する。

#### 2. 移動支援の継続

二本松市からの通所者と浪江町から福島市や郡山市などに避難した通所者のために移動支援を継続実施する。

#### 3. 新事務所への移転完了

法人事務所と作業所が一体となった現在の狭い事務所から、相談室や休憩室を備えた、作業所として十分なスペースを確保した新事務所へ移転する。





新事務所で全員集合

## 1. 専門職雇用による就労継続支援事業所の 基盤強化

病院勤務10年のベテラン職員を雇用した。また、前年度インターンとして活動していた若手を雇用した。結果、週1回の通所だった利用者が週3回に、長期に欠席する利用者が続けて通所ができるようになった。また、新規採用職員の長い病院勤務の経験を生かし、組織の役割分担など明確にするよう内部変革ができた。

## 2. 移動支援の継続

ドライバー2名を雇用し、福島市⇔二本松⇔郡山間の送迎を2台の車両で実施し、合計14名が送迎を利用した。移動支援の提供によって、コーヒータイムを利用希望する障がい者が二本松市を中心に多数いることがわかった。

\*福島⇔二本松間=片道約40\*。

避難中の利用者 1名(福島市飯坂) 地元利用者 4名(福島市、二本松市)

\*郡山⇔二本松間=片道約60\*。

避難中の利用者 2名

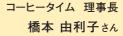
地元の利用者 7名(本宮市、二本松市)

## 3. 新事務所への移転完了

法人事務所と作業所が一体となった現在の狭い事務所から、相談室や休憩室を備えた、作業所として十分なスペースを確保した新事業所兼事務所を二本松市市役所から紹介され移転した。浪江町から避難し、二本松で活動を始めたが、二本松市市民交流センターの運営委員会定例会(年4回)に参加するなど、避難先の地域からも認知されるようになり、地域の相談支援事業所が利用者の紹介を頻繁にしてくれるようにもなった。喫茶店コーヒータイムも着実に二本松市の憩いの場所として定着してきた。

## Doice

## 担当者の声





#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

長期事業計画が立てられるようになった。先の見えない原発避難の中、事業所の本拠地をどこに定めるか迷っていたが、避難先での定着支援をして頂いたおかげで、地元利用者の増加や二本松市の公的機関との連携を強めることができ、避難先で事業の拡大を図っていける自信がついた。そして2年後、5年後の事業計画が描けるようになった。

#### <見えてきたこれからの課題>

助成金を利用して移動支援を実施してきたが、今後自力で移動支援ができるのか。また何時まで避難者と言うことで遠距離の送迎を続けるのか。職員の労働時間や仕事の内容に合った処遇改善も図りたい。

## Doice.

## 関係者の声

南相馬ファクトリー 理事中田 建一郎さん



#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

コーヒータイムさんとは、原発事故により影響のうけた福島県浜通りの福祉事業所の仕事づくりを通じて知り合いました。つながりボールペンの糸の多様さや受注の複雑さに対応してくれる頼もしい事業所です。月産2~3000本の製作を担っています。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

一般企業などからボールペンづくりのワークショップの依頼があることは予想外のうれしい展開でした。県内から出たことがない障がい者と障がい者と触れ合うことの少ない企業とが共同の作業を通じて理解し合うためのお手伝いをさせていただきました。



# 「HELP!みやぎ」相談・フォローアップ継続、中間就労事業継続・発展、新規雇用創出事業継続・発展

## 特定非営利活動法人仙台夜まわりグループ

http://www.yomawari.net/

■主な活動地域 : 宮城県仙台市

■主な支援対象 : 生活困窮者全般(路上生活者を含む不安定居住者、経済的困窮者、障碍者、高齢者、生活保護受給者)

## ■ 活動概要

当団体は、2000年から仙台市内で路上生活者の支援活動を開始し、震災後は、これに加えて炊き出しや物資提供、仮設住宅への入居支援など、総合的な被災者支援活動を実施してきた。助成1年目は、これまでの路上生活者の支援を拡大し、生活困窮者自立支援を主たる目的として、相談センター「HELP!みやぎ-生活困窮者ほっとライン」を開設し、相談から同行支援やアフターフォローまでを行った。助成2年目は、相談センターで年間1,000人の相談をうけ、就労にむけたトレーニングとなる中間就労事業でも有給スタッフへの雇用などの成果が見られた。助成3年目は、前回から着手したフードファーム事業の発展に取り組む。提携農場での中間就労の場を維持しながら、独自農園を開設し、就農者育成と、作物の配食サービス提供を目指した。

#### 1.「HELP!みやぎ」相談事業の継続

相談スタッフのスキルアップを図り、相談者が問題解決にいたるようにするとともに、丁寧なアフターフォロー活動を事業化して相談者の歩みに伴走支援する。

#### 2. 中間就労事業の継続と発展

試験的に取り組んできた配食・掃除サービス(生活支援を含む)を継続・拡大させ、現行のリユース事業とともに中間 就労事業の核として整備し事業化することにより、雇用を創出する。

### 3. 雇用創出事業の開始

新規雇用創出の場としてフードファーム事業を立ち上げて、2015年春から農耕作業を始める。秋の収穫期には、農作物を出荷して被災者支援や自団体の炊き出しや配食事業への提供を目指す。



「HELP! みやぎ I相談



## 1.「HELP!みやぎ」相談事業の継続

2015年10月から2016年9月までの間に738件(うち新規相談者は135名)の生活困窮者からの相談に対応した。相談の80%が住宅相談と家計相談であり、行政やNPOの施設や支援制度へのつなぎを行った。また、的確なつなぎ先の紹介ができるようにスタッフに対して、隔月ペースで研修を行った。生活困窮者自立支援法に掛からない生活保護受給者の生活相談はHELP! みやぎと認識されている。

HELP!みやぎの相談者や自立支援中間施設に住んでいる人の中から、疾病、障害、依存などが原因で生活困窮に陥っている人に病院への同行を216件、総時間数480時間行い、適切な治療と安心できる環境整備を支援した。

一部居宅支援者および緊急性の高いグループホーム入居者に対して重点的に生活リズム再構築のための伴走支援を実施した。支援対象者は各種依存や知的・精神的障害を持っている人が多く生活の基本から伴走をした。週に一度の定期訪問や安否確認、体調管理や服薬確認等を行った。結果として、グループホームから卒業し、アパート独居や自炊型施設へ移行した人が月に1.5人出た。さらに、当団体の支援活動から卒業した人に対しても見守り活動としてアフターフォロー活動を月に120回実施した。

### 2. 中間就労事業の継続と発展

試験的に取り組んできた配食・掃除サービスを継続・拡大した。配食サービスでは提携団体のほっと亭から半調理品の提供を受け、グループホーム13人収容で週に4回実施した。このサービスでは月に延べ16人の時間就労を実現した。掃除サービスは当初目標が月15名の就労だったが、平均すると月4件、1回5時間で、延べ8名の時間就労を提供した。また、宮城県亘理町の三上農園と提携し、繁忙期に週2回の中間的就労の場を提供し、月に延べ8名を支援した。

### 3. 雇用創出事業の開始

2015年9月より中間的就労の拠点フードファーム「喜望」を開設し、3月~9月に週2~3回、月に延べ20名へ中間的就労の場を提供した。

## Doice

## 担当者の声

仙台夜まわりグループ 理事/ヘルプ!みやぎ相談センター長 塩見 豊久さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

常設相談コーナー設置により、本当に困っている方々との巡り会う機会が格段に多くなり、輻輳した問題を整理しながら自律へ繋げることができた。支援活動が可能となり活動の幅が広がった。

#### <見えてきたこれからの課題>

震災後の復旧・復興過程では道路や建物などのインフラは整備されつつありますが、原発・除染作業を含め、その復興事業によって生み出されてきている生活困窮者へのきめ細やかな自立支援が必要となっている。

## Doice

## 関係者の声



元当事者Aさん

#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

3年前、職場を失い同居していた友人宅を追い出されて 途方にくれていたときHELP!みやぎを知り相談に行きま した。宿泊所を紹介され一息つけることができました!

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

相談の中で自分の過去を話す中で、殆ど学校で学ぶことをしてこなかったことが今の自分のにつながっているんだと自覚できたこと! 相談の中で定時制高校を知り入学できたことが一番うれしかったことです!



## 被災者の就労支援と地域への配食サービス・ 高齢者見守り支援事業

## 一般社団法人ワタママスマイル

http://watamamasmile.org/

■主な活動地域 : 宮城県石巻市東部(渡波地区)

■主な支援対象: 再就職が困難な女性、仮設住宅や在宅の高齢者世帯

## ■ 活動概要

当団体は、震災後、青年海外協力隊OB/OGによって組織された「協力隊OV有志による震災支援の会」として発足 した。助成1年目は、配食事業の拠点「ワタママ食堂」を開設して地域の女性の就労を支援した。助成2年目の活動で は、弁当の配食対象を工事関係者などにも広げて採算ライン200食を越える注文数を確保した。今回の継続助成で は、復興工事終了後の顧客確保も見据えて、栄養バランスに配慮した「ヘルシー弁当」の開発や生活困窮家庭の子ど も達への「こども食堂弁当」などの取り組みも開始する。地元女性の就労支援から始まった活動が、地域にしっかりと 根ざして、広がりを持った活動として定着していくことを目指す。

### 1.「ヘルシー弁当」づくりと配食サービス

新たに管理栄養士を雇用し、スタッフが栄養バランスや塩分・カロリー計算をできるよう育成し、地域の高齢者のた めの「ヘルシー弁当」を開発する。

### 2.「こども食堂」への弁当提供

栄養バランスやカロリーが管理された「こども食堂弁当」を地域の「子ども食堂」に提供する。

### 3. 就労支援と高齢者の見守り支援

子育て中の女性や、ひきこもりの若者、就労を希望するシニアなどに対して、「ワタママ食堂」での就労の機会を提供 する。



お弁当づくりに励むワタママさん



フタママ弁当を食べる高齢者のみなさん

## 1.「ヘルシー弁当」づくりと配食サービス

- ・宮城県栄養士会より非常勤で派遣された管理栄養士から、カロリー計算の基本、塩分量の見積り、実際に塩分を減らすメニュー作りなど具体的な指導を受けた。
- ・管理栄養士の指導を受け、栄養バランスや塩分・カロリーなどが管理された健康管理弁当(ヘルシー弁当)の基本メニュー 5種類を開発した。6月から通常の日替わり弁当と並行して本格販売を開始し、高齢者や女性を中心に1日最大42食の配食を行った。
- 高齢者の利用者のうち約10人がほぼ毎日この弁当を利用しており、普通の弁当よりも栄養バランスがいいので継続利用したいとの声が多かった。

## 2. 「こども食堂」への弁当提供

- ・9月より石巻市渡波地区内に「渡波地域子ども食堂」 を開設し、生活困窮家庭の子どもを中心に食事支援 と居場所づくりを行った。1回目の参加者が63名と予 想の2倍程度の参加があり、関心の高さが伺われた。
- ・10月より石巻市内の子ども支援団体「放課後こどもクラブ・ブレーメン」と協力し、子どもの夕食用に栄養バランスや塩分・カロリーなどが管理された弁当を週に1~2回、1回に5~10食提供した。

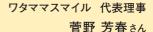
### 3. 就労支援と高齢者の見守り支援

- ・弁当配達や調理のスタッフとして、シニア男性3名(1名は震災後にアルコール依存症に罹った人、1名は震災で家族を亡くした人、1名は持病を抱えている人)と引きこもりの若者2名(女性1名、男性1名)を雇用した。
- •特定非営利活動法人Switchと連携し、引きこもりの 若者の就労支援説明会を開催した。さらに就労支援 の一環として、データ入力などを引きこもりの若者8名 に依頼し、就労に結び付けた。
- •石巻市社会福祉協議会や仮設住宅自治会、地域包括 支援センターなどと連携し、弁当配達時にのべ55名 の高齢者の見守り支援を実施した。一人ひとりの見守 り状況(安否、体調、メニュー、食事量など)を記録し、 情報の蓄積と連携団体との情報交換により、地域全 体で見守り・支援する仕組みの構築に取り組んだ。

この一年は「地域の食のサポーター役となり、地域復興に食で貢献していく」ことを目標の一つとして積極的に地域に広報した。その結果、渡波地域の自治会や小中学校、公民館、子どもクラブ、敬老会、葬祭会社、さらにはホテルやゲストハウスなどの宿泊施設に「ワタママ食堂」の名前が浸透し、弁当やオードブルなどの依頼が頻繁に入るようになった。

## Doice

## 担当者の声





### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

これまでの勘と経験による弁当作りから管理栄養士による指導により塩分やカロリーを計算し、健康に配慮して栄養バランスや味付けを考慮した弁当作りをするようになり、調理スタッフの意識と行動が大きく変化した。

#### <見えてきたこれからの課題>

今後のワタママ食堂の配食事業において自立運営の予定であったが、実際にはそこまでには至っておらず、今後はいかに採算を確保して、事業経営を安定させるかが大きな課題となってきている。

## Doice

## 関係者の声

石巻市渡波第二仮設住宅自治会 高橋 茂さん



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

ワタママ食堂のお弁当を毎日利用しています。私は足が 悪くタクシーを使わないと買い物にも行けないので、仮設 住宅まで配達してくれるワタママ食堂のお弁当にはとて も助かっています。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

ワタママ食堂の手作り弁当は日替わりのメニューでとてもおいしく、しかも毎日仮設住宅まで届けてくれて声を掛けて頂き、時には話し相手にもなってもらい、とてもうれしい毎日です。



## 生きがいから雇用へ(ゆめハウスからの広がり) プロジェクト

## 一般社団法人コミュニティスペースうみねこ

https://m.facebook.com/mamasupporters

■主な活動地域 : 宮城県女川町

■主な支援対象 : 仮設住宅の高齢者、職を失った被災者

## ■ 活動概要

当団体は、震災によって人口が半減した宮城県女川町で、地域住民、特に高齢者の生きがいづくりや雇用創出を通 じてコミュニティの再生に取り組んできた。助成1年目は、高白浜地区に唯一残った倉庫を修復し、食品加工場兼カフ ェ「ゆめハウス」をスタートすると同時に、隣接する土地に果樹園と農園を整備した。助成2年目は、「ゆめハウス」のコ ミュニティスペース化を進めると共に果樹園と農園から採れたイチジク、にんにく、唐辛子を原料とした新規特産物 の開発に取り組んだ。助成3年目は、地域のさまざまな団体と連携しながら、各プロジェクトの更なる深化を目指し た。特に農産物の販売に注力し、女川生まれの新商品の開発・販売を行うことで、地域の住民が様々な形で事業に参 画した6次産業のモデル化を目指した。

### 1. コミュニティカフェ「ゆめハウス」の運営

60~90歳の地元女性が中心となって調理、接客、食材の仕入れまでを行う。

#### 2. 農園の運営と生産物の販売

津波の影響で塩害に遭った土地を再生し、イチジクや唐辛子、にんにくを栽培、加工して商品化する。民間と自治体の 協働による女川町の6次産業化のモデル事業として推進する。

#### 3. 古着Tシャツを素材としたオリジナル布草履などの製造販売

60 ~ 90歳の地元女性を中心に全国から寄せられたTシャツを利用して、手仕事で商品を製造・販売する。



お正月用しめ縄のワークショップ



学生ボランティアに「ゆめハウス」について説明

## 1. コミュニティカフェ「ゆめハウス」の運営

地元の高齢者9名、20~30歳代の若者5名のスタッフを雇用した。カフェでは、高齢者が献立の作成から食材の仕入れ、調理、接客を行い、地域の食材を使った家庭料理を提供した。その他お弁当の配達、「さんまなたい焼き」の出張販売も行った。助成期間中は、県外からの若いインターンやボランティアを受け入れたり、食品衛生や、調理に関する専門知識の習得にも注力した。震災後の地元高齢者の生きがいづくりから始まった事業だが、若者も雇用し、活動の幅と質の向上を目指すことで、持続的な雇用の創出をめざした。

## 2. 農園の運営と生産物の販売

地元の高齢男性が、津波の塩害に遭った土地を再生し、獣害を受けにくく高齢者でも持ち運びやすい唐辛子やイチジク、にんにくの生産、加工、販売を行った。「女川とうがらし」は人気商品になった。ウェブサイトを通じた販売・販売促進や、地域外での販売促進活動にも注力し、90%以上の商品を販売できるようになった。6次産業を進めている団体への視察や、農作物のブランディングなどの専門知識の習得にも努めた。

さらに他団体との協働も進め、南三陸町のさとうみファームとのコラボで羊肉のソーセージを商品化した。

## 3. 古着Tシャツを素材としたオリジナル布草 履などの製造販売

被災した地元高齢者の居場所・生きがいづくりのため、全国から寄せられた古着 Tシャツを利用して、オリジナル布草履を制作し、販売した。布草履以外にも古着 Tシャツを利用して、コースター、キーホルダー、鍋敷を制作・販売した。また高齢男性が制作した「ゆめ玉ストラップ」はこれまでに総計7000個を販売した。また「女川フィッシュ」と連携して箸の生産と販売をした。

## Doice

## 担当者の声

コミュニティスペースうみねこ 代表 八木 純子さん



### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

唐辛子やいちじくの生産が安定し、加工品が作れるようになり販路も見えてきた。その中で関係者は「生きがい」から「やりがい」に変わってきました。

#### <見えてきたこれからの課題>

商品が安定化してきているのでこれからは販路を増や し収入に繋げ、自立できるようにしていく。そのためにス タッフのスキルアップが必要である。

## Doice .

## 関係者の声

ゆめハウス スタッフ 宮里 彩佳さん



### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

ゆめハウスのスタッフとして働いています。 乳児を抱え仕事を探していたところ、知人からの紹介で 働くことになりました。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

これまで、趣味としていた部分を実際の商品づくりに生かすことができるなど、自分の可能性が広がったように思います。小さな子供がいることも十分に考慮してくれる点が、とてもよかったと思います。



## 観光羊牧場を核とした被災地域の活性と 雇用創出を目指す活動

## 一般社団法人さとうみファーム

http://satoumifarm.org/

■主な活動地域 : 宮城県南三陸町

■主な支援対象 : 地域住民

## 話動概要

当団体は、宮城県南三陸町の被災地での子どもの遊び場の提供から活動を開始し、その後、羊牧場を中心として、被災した子どもたちの心のケアに取り組んできた。羊牧場では、南三陸のわかめ残渣を飼料として与えた羊を飼育して羊肉のブランド化に取り組んだ。羊牧場は観光牧場としても整備され、シーカヤック体験ツアーをスタートするなど、南三陸の新たな観光産業の創出と地域の再生への貢献に注力した。助成3年目となる今回は、わかめ発酵飼料を量産化し、廃棄わかめの有効活用を通じて収入の安定化を目指した。また、地域行政、教育機関、諸団体との連携を通じて、南三陸の地域活性化に貢献した。

#### 1. わかめ発酵飼料の量産化

年間数百トンの廃棄わかめ残渣を家畜牛の飼料として量産化する。

## 2. 観光羊牧場の整備・拡充

遊具設置、放牧地造成、ビオトープ、キャンプ場開設、BBQ施設の拡充を通じて観光牧場の魅力を増進する。南三陸教育委員会と連携して小学校の課外授業で羊飼育体験や食育のカリキュラムを提案する。

### 3. シーカヤックを使った子どもたちの心のケア活動

シーカヤック体験教室を拡充し、年間100名の南三陸の子どもたちに提供する。

## 4. 地元団体との連携による観光客誘致

南三陸観光協会、ホテル、民宿、企業、漁師等との連携システム を構築して、観光羊牧場やシーカヤック教室等を利用した観光 ツアー企画を提案し、観光客誘致を目指す。



南三陸町の子どもたちのためのシーカヤック体験教室



### 1. わかめ発酵飼料の量産化

廃棄わかめを10トン確保し、わかめ飼料の発酵生産を220ℓ容器43本で実施した。肉牛の飼料としての汎用性を追求し、量産化による収入向上を目指した。繁殖牛の健康向上目的でのわかめ飼料の利用は実現可能であり、牛への給餌試験を実施した。

### 2. 観光羊牧場の整備・拡充

「海の見えるウッドテラス」BBQ広場、「さとうみウール工房」、ビオトープ「ちゃぷちゃぷ池」、第一牧場放牧地を新規整備した。南三陸町名足小学校1年生の授業を羊牧場で実施し、羊の飼育体験、遊具遊び、写生会を実施した。地元高齢者にワークショップ(羊毛喫茶)を月2回開催し、地元高齢者の居場所づくりに貢献した。コミュニティ誌「寄木だより」を隔月発行し、羊牧場に関する情報発信を地域に行った。来場者は着実に増加したが、月150万円の売り上げ目標は、月平均20万円にとどまった。わかめ飼料、羊毛製品、羊肉の生産・販売等にも注力し、自力で持続的に運営できる体制を整えていく。

## 3. シーカヤックを使った子どもたちの心の ケア活動

シーカヤック体験教室「子どもカヤッククラブ」を実施し、南三陸の子ども74名が参加した。

### 4. 地元団体との連携による観光客誘致

南三陸観光協会の試験導入システム「みなたび」に参加協力した。連携宿泊先を自団体ウェブサイトに掲載した。同時に連携宿泊先HPにカヤックツアー等の紹介を依頼した。観光羊牧場のBBQ広場にて、地元寄木港産ホタテ、牡蠣などの地元海産物の販売を行った。

南三陸町内の団体(特定非営利活動法人ウィメンズアイ、南三陸ふっこう青年会)と連携して、マルシェやクリスマスイベントを開催した。また、地域外の団体(一般社団法人コミュニティスペースうみねこ、一般社団法人あむえこねっとと連携して、神奈川県鎌倉市でひつじ祭りを開催、横浜市で「なごみフェス」を開催して、地域の観光の広報活動を行った。

活動開始から5年を経過し、地道な活動を通じて、 地元コミュニティとの信頼関係が醸成され、地域活動 には必ず地元団体から声をかけられるようになった。ま た台風後の障害物の撤去作業や除草作業、除雪作業 などには率先して参加し、地域活動に積極的に貢献し た。地区の祭りの復活を地元の若手と相談できるほど 地元コミュニティに認知される存在になってきた。

## Doice

## 担当者の声

さとうみファーム 代表理事金藤 克也さん



#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

活動及び組織的にも成長し、安定した運営が出来るようになった。また、地域との繋がりが深まり活動の幅も広がってきた。

#### <見えてきたこれからの課題>

この3年間の活動の中で見つけたシードを育て収益の柱とし、継続的な活動を目指す。

## Doice .

## 関係者の声

前寄木自治会 会長 畠山 吉文さん



#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

わかめ作業所の建設の時に知り合い、牧場の立ち上げの時に協力した。

#### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

この6年間寄木の浜の為に頑張ってくれて、地域住民大変喜んでいる。



## 長面浦さとうら再生計画 ーはまなすカフェからの挑戦

## 一般社団法人長面浦海人

http://nagatsuraura.jp/

■主な活動地域 : 宮城県石巻市長面浦とその周辺

■主な支援対象 : 宮城県石巻市長面浦(ながつらうら)地域の漁師とその家族、大川地区の元住民など

## ■ 活動概要

当団体は、津波で壊滅的な被害を受けた石巻市北上川河口域にある長面浦の漁師たちが中心になり2013年に設立した非営利法人で、津波で壊滅的な被害を受けた大川地区(石巻市尾崎、長面、釜谷の3集落)の再生を目指して活動している。漁師たちは約20km離れた仮設住宅から、災害危険区域に指定されたこの浦に通い、牡蛎養殖や刺し網漁を営んでいる。地域の人々が集う場として「長面浦はまなすカフェ」を地元に定着させるとともに、地域内外と人々との交流を柱に地域再生活動を展開している。

### 1. 長面浦はまなすカフェの運営

長面浦の自然と食材をPRするとともに、地域内外の人が集う場として、地元漁師の妻らが毎週日曜日に地元食材を使った料理を提供している。

### 2. 漁業体験による交流人口拡大

広葉樹林に囲まれた穏やかな内海という環境を活かし、環境や食の大切さを学ぶプログラムを提供し、環境教育と交流人口の拡大を図る。

### 3. 地域に開かれたコミュニティ活動

「長面浦牡蛎まつり」などのイベントを通じて、震災で傷ついた地域コミュニティの再生を図る。



漁師の妻らが「長面浦はまなすカフェ」を開業。 地域再生の拠点となっている。



長野県の子どもたちを長面浦に案内し、自然環境や牡蛎の生態につい て教える代表・小川英樹

#### 1. 地域に開かれたイベント

漁業と地域活動の拠点「長面浦海人の家」(番屋)を運営。自慢の牡蛎をふるまう「長面浦牡蛎まつり」」や映画上映会など、仮設で暮らす人々を招きイベントを行っている。2016年3月の牡蛎まつりには400人以上が参加した。震災後初めて復活した長面地区の祭り「大般若巡行」でも、牡蛎やムール貝を振る舞った。

### 2. 「はまなすカフェ」運営

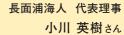
2015年春に開設した「はまなすカフェ」の存在が、地域内外に浸透した。牡蛎出荷繁忙期には漁師の妻も多忙になるが、隣接集落の仮設住民をスタッフとして営業を続け「毎週日曜日営業」を定着させた。これによりカフェの存在が広く知られるようになった。SNSでの発信も続け、ボランティア経験者らの来訪も続いている。平日には被災地見学や地元女子会などの団体予約客も受け入れ、ほかに建物がないなか、地域の拠点となっている。また、お彼岸・お盆には「お茶っこ開放デー」を設け、お墓参り帰りの住民らを受け入れている。

### 3. 地域間交流と体験学習

牡蛎が7ヶ月で育つ穏やかな内海という条件を活かし、震災後にボランティアや仮設訪問などで縁を得た他県の人々や地域の子どもたちを対象に、牡蛎筏見学や牡蛎むき体験などを通して長面浦の自然環境への理解を深め親しみを感じてもらうよう努めている。地元小学校児童の体験学習も地域の合意を得て行った。また、夏の環境学習向けの漁業風景のビデオ教材を作成している。被災地見学ツアーを企画しているNPOなどとの連携が生まれ、今後は体験学習の収益化も目指している。

## Doice

## 担当者の声





#### <助成事業期間を通して、いちばん変化したこと>

「はまなすカフェ」の存在が知られるようになり、地域内外の交流や語り部ツアーの拠点として使われる機会が増えた。カフェを中心とした地域再生活動という趣旨が伝わり、活動が安定してきた。

#### <見えてきたこれからの課題>

カフェを安定的に運営できる収益構造をつくる必要がある。2017年度から始まる集団移転に備え「住めないふるさと」をどう盛り立てていくか、他の団体や行政とも連携しながら取り組んでいきたい。

## Doice

## 関係者の声





#### <団体との関係・関わり、そのきっかけ等>

釜谷地区には建物が何もなくなってしまったため、ボランティア活動に来てくれる人の休憩場所としてカフェを活用させてもらっています。こうした施設が地域にあることでとても助かっています。

### <いちばんうれしかったこと・よかったこと>

2016年度、大川地区の被災前の姿を模型に再現する事業ができました。地域の人と模型を囲んで話ができ、感無量でした。これも幹事団体・長面浦海人の活動実績あってのことと思います。ご支援に感謝します。

### 認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター タケダ・いのちとくらし再生プログラム事務局

〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245

 $TEL: 03\text{-}3510\text{-}0855 \ / \ FAX: 03\text{-}3510\text{-}0856$ 

E-mail: info@inochi-kurashi.jp / URL: http://www.jnpoc.ne.jp タケダ・いのちとくらし再生プログラム URL: http://www.inochi-kurashi.jp

Facebook http://www.facebook.com/inochi.kurashi

タケダ・いのちとくらし再生プログラム 成果報告書 vol.7 (2016年3月・9月助成事業終了団体)

発行日:2017年11月30日

編集・発行:認定特定非営利活動法人日本NPOセンター/印刷:(株)美巧社/デザイン:オフィス・ホワイトクロウ